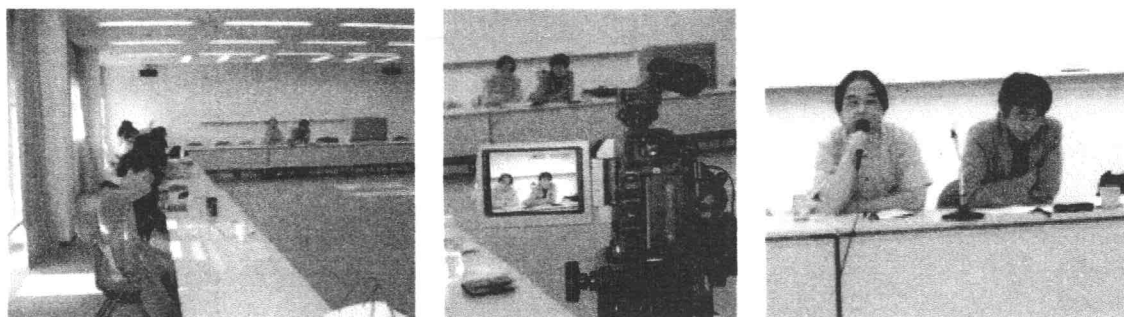


News Letter



新しくできたマルチメディア講演室における研究会の光景（第5回研究会より）

甲南大学人間科学研究所は、「心の危機と臨床の知」をキーワードに、現代の人間が直面する危機的状況に光を当て、未来を切り拓く実践へとつないでいくことを目的に設立されました。「人間科学Human Sciences」は、人間に関する科学的研究全般を表わす言葉ですが、単に科学として研究するのみならず、倫理的に判断し、能動的に関わることを目指すところに本研究所の特色があります。そのために、甲南大学カウンセリングセンターと連携するとともに、甲南大学の学内だけでなく、学外の研究者や研究機関とも連携し、阪神地区の研究、実践の拠点となることを目指します。

活動の一つの核は、臨床心理学の実践組織である甲南大学カウンセリングセンターと連携した、心理療法、カウンセリング、プレイセラピーなどをはじめとする臨床心理学的な研究、実践です。その臨床的実践と並行し、また連携しながら、甲南大学文学部人間科学科の理念を基盤に、思想、文学、芸術学、社会学、歴史学などの文学部に所属する各学問から、経済学、法学といった他学部にもまたがる幅広い学問分野の協力によって現代の危機的状況を理解し、社会に向けて発言していきます。

研究所では、毎年1回のシンポジウムのほか、小シンポジウム、研究会などを通じて議論を深めていながら、専門家を対象とした研修会、あるいは一般の方を対象とした講演会なども開催して、研究成果を地域へ還元します。出版によっても、研究成果を世に問うていきます。

今後、研究所の活動に注目していただき、さまざまな形で参加して下さいますよう心よりお願い申し上げます。

第1回研究会

タビストックにおける

トラウマへのアプローチの実際

講師 田中 健夫

(九州大学学生生活・修学相談室、

高等教育総合開発研究センター助教授)

日時 6月20日(金) 午後4時30分～6時

場所 18号館2階演習室



トラウマとは、臨床において対処すべき実際的な課題であると同時に、臨床実践を行う上でのひとつの視点でもある。日本では、阪神淡路大震災の後、PTSD概念とともにトラウマという視点が広く受け入れられるようになった。大きな犯罪や事故の後に臨床心理士が派遣されるなど、理論においても臨床においても、トラウマ概念は現代の日本の臨床心理学に多大な影響を与えている。しかし当然ながら、欧米のトラウマ概念をただ輸入するだけでは十分ではない。文化的な差異を考慮しつつ、虐待や犯罪被害者への具体的な援助のあり方を探求し、さらに理解を深めていくことが必要とされている。

まず、講師の田中健夫氏により英国の医療システムとタビストック・クリニックが紹介された。続いて、タビストック・クリニックにおけるトラウマの精神分析的コンサルテーション面接を記録したビデオが取り上げられ、実際の場面を観ながらディスカッションが行われた。

一人息子を交通事故で亡くし、そのトラウマの影響により日常生活を送ることに困難を抱えていた夫婦、ケンとスーはBBCテレビの相談面接のプロジェクトに応募した。そして、タビストック・クリニックで4回にわたる精神分析的なコンサルテーション面接が行われた。面接では、生き残ったことへの罪悪感や「なぜそのような事故が起こったのか」という問いをめぐるさまざまなファンタジーが積極的に取り上げられ、言語化された。

二人の弔い手が、相手を護ろうとするためお互いの気持ちを伝えられないことで、かえってすれ違いや困難が起きることがある。夫婦面接というセッティングのなかで、セラピストのキャロラインはケンとスーの喪の作業のプロセスが異なっていることを確認していった。それによって二人は各々の問題に気づくことができたのである。

精神分析的な理解によると、トラウマとは既存の防衛を打ちのめして最も深い普遍的な不安を顕わにしてしまう出来事である。そのため、幼少期の未解決な痛みや葛藤が例外なく呼び起こされるという。トラウマのこうした特徴は文化差を超えた本質的なものだと考えられるだろう。他方、ビデオで観たような積極的な解釈や言語化を含めたインテシヴなコンサルテーション面接は日本ではめずらしいものかもしれない。しかし、喪のプロセスの違いを言葉で確認していくことなど、日本の臨床でも参考になることも多かった。



Caroline Garland, *Understanding Trauma: A Psychoanalytical Approach*

(*Tavistock Clinic Series*), 1998, Routledge

■ これまでの活動

甲南大学人間科学研究所開所式／2003年4月19日（土）

【研究会】

- 第1回 タビストックにおけるトラウマへのアプローチの実際
田中健夫／6月20日（金）午後4時30分～6時
- 第2回 フランス・フェミニズムの30年——E・バダンテールの新著（2003.4）を巡って——
上村くにこ／6月25日（金）午後3時～5時30分
- 第3回 児童養護施設における心理治療事例と解離について
田中究（神戸大学／児童精神科医）／7月22日（金）午後4時30分～6時30分
- 第4回 「外国人」の精神医療と市民権
植本雅治（神戸市看護大学／精神医学） 「インドシナ難民とこころの問題」
松葉祥一（神戸市看護大学／哲学・倫理学） 「移民の市民権——日本とフランスの場合」
7月28日（月）午後4時30分～6時30分
- 第5回 癒しを巡る宗教と心理
垂谷茂弘（舞鶴工業高等専門学校）／9月26日（金）午後4時30分～6時

【研修会】

- 第1回 園芸療法研修会(1)～園芸療法の基礎～
浅野房世（姫路工業大学教授・兵庫県立淡路景観園芸学校主任講師・農学博士）
8月25日（月）午前10時30分～12時30分

■ これからの活動

【研究会】

- 第6回 トラウマという場所（仮題）／下河辺美智子（成蹊大学）／11月21日（金）午後4時～

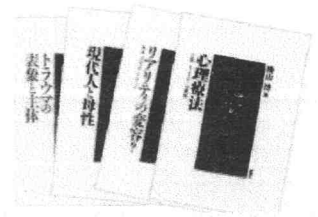
【研修会】

- 第2回 園芸療法研修会（2）～モーニングワークにおけるヒーリング・ランドスケープ～
浅野房世（姫路工業大学教授・兵庫県立淡路景観園芸学校主任講師・農学博士）
10月17日（金） 午後4時30分／18号館3階講演室
- 第3回 公開ワークショップ「トラウマ臨床の理論と実践——精神分析的アプローチ——」
田中健夫（九州大学学生生活・修学相談室、高等教育総合開発研究センター助教授）
12月6日（土）、7日（日）／18号館内／定員20名
- * 臨床心理士向けのワークショップです。事前に参加申し込みが必要となります。詳しくは人間科学研究所までお問い合わせください。

【出版案内】◆シリーズ《心の危機と臨床の知》

1998年から5年間にわたった甲南大学学術フロンティア共同研究プロジェクトの成果が、4冊の本として新曜社より刊行されました。

森茂起編『トラウマの表象と主体』、松尾恒子・高石恭子編『現代人と母性』、斧谷彌守一編『リアリティの変容?——身体／メディア／イメージ』、横山博編『心理療法——言葉／イメージ／宗教性』



「編集後記」 さわやかな秋になりました。「秋・あき」という言葉は、この季節、空気が澄んで晴れ渡り、空がくっきりと「明らか」になるところから来たとも、男女が夏を越えてお互いに「飽きる」ところから来たとも。実りの秋、研究者としては、研究活動に飽きることなく、物事を明らかにしていきたいものです。

KIHS NEWS LETTER

発行 甲南大学人間科学研究所

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

Tel & Fax > 078-435-2683

E-mail > kihs@center.konan-u.ac.jp

Web-site > http://kihs.konan-u.ac.jp

第2回研究会

フランス・フェミニズムの30年

——E・バダンテールの新著(2003.4)を巡って——

講師 上村くにこ(甲南大学教授)

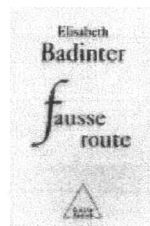
日時 6月25日(水)午後3時~5時30分

場所 18号館2階演習室

ジェンダー問題は、政治経済に密接かつ複雑に絡み合っ
て社会的文化的コンテクストを形作っている。政治面、経済面
で進んでいるグローバリゼーションとそれに反対する動き
は、ジェンダーに関わる諸問題にも当然見られる。上村氏は
フランスのリベラル・フェミニストの論客E・バダンテール
を批判的に紹介しながら、フランス・フェミニズムの30年
の変転を追ひ、さらに、現在EU統合で浮かび上がっている
論争を述べた。ヨーロッパ会議では、男女平等、さらには女
性優位を主張するアメリカ型のフェミニズムが女性の人権
問題を左右しており、これは、ヨーロッパ各国間での男女の
捉え方における文化的歴史的差異を無視したものといえる。
シラク政権は、下院などの女性議員の割合がEUの中で低位
だったのを改善するため、2000年に「パリテ法」(パリテと
は半々という意味で「政治的男女同数法」などと訳される)を制定、
3500人以上の自治体すべてに適用する。この法律によって、
小選挙区制の下院の場合、候補を男女同数としない政党は助
成金減額の制裁を受ける。

パリテ法に反対するバダンテールは、男女を生物学的本質
主義的に二分してその対等性を主張するのではなく、逆に男
女の偏差が社会的構築物だとして両者を融解させてしま
うのではなく、いわば流動的な点線で男女を境界づける。そし
て、男女どちらが優位ということなく互いに浸透しあいなが
ら、つまり役割を交換し補完し合いながら望ましい均衡関係
を築きうると主張する。上村氏によると、ここにはフランス
は男女の事柄については他国よりも優れているという自画
自賛の匂いが感じられる。また出席者からも、バダンテール
のいうユニバーサリズムはフランス・ナショナリズムと読み
替えられるのではないかと意見が出された。

質疑応答の後半では、フランス・フェミニズムの動きを横
目でにらみつつ、日本の状況について議論が交わされた。日
本では欧米に追随するかたちでフェミニズム運動が展開し
ているが、現場のレベルでは、反権力的な取り組みがいつの
間にか行政側に絡め取られてしまう脆弱さが指摘された。



Elisabeth Badinter.

Fausse route : Réflexions sur 30 années de féminisme, 2003, Odile Jacob